

副社長の愛の囁き（イケボ）に蕩けそうです

第一章 夢ですか？ それとも現実？

都内某所にある居酒屋では、広告会社アドネットクラフトの新社員歓迎会が行われていた。金曜の夜らしく、店内は仕事帰りの会社員が大勢おり、騒がしい。そんな中、座敷を貸し切り、二十人ほどの参加者が二つの座卓に分かれて座っている。

（今日は、『先輩の初めてを俺にくださいⅡ』の配信日なのに……）

葵はちらちらと腕時計に視線を落としながら、カクテルを一口飲んだ。ここから帰るには葵の自宅は少し遠い。JR線で一本ではあるものの、一時間以上かかる。

家に帰ってから配信を聴くため、飲みすぎないようにしなくては。

「芽衣もこのあと帰るよね？」

葵は腕時計から顔を上げて、隣に座る同期の桜田芽衣に声を掛けた。

こうして友人と顔を合わせて食事ができるのは嬉しいが、プライベートに踏み込むほどの仲でもない同僚たちとの食事は少し気疲れしてしまう。

普段リモートが多く、週に一度しか出社しないからよけいにそう思うのかもしれない。

「うん、もう少ししたら彼が迎えに来てくれるみたい」

「相変わらず恋人と仲いいよね」

感心したような口調で葵は言った。恋人など長い間いないが、羨ましさを感じたことはない。

「まあね。付き合いも長いし」

「そうだったね」

頷きながら、葵は斜めに下ろした前髪を指先で軽く払い、背中まである緩く巻いた髪を耳にかけた。

長いまつげはなにもしていなくともくると反り返っており、葵の大きな目をよりぱつちりと見せている。小ぶりでありながら鼻梁は高く、形良く厚めの唇は艶めかしささえ感じるほど。

食べても太れない体質のせいで、すらりと背が高く、腰は細い。

どこからどう見ても隙のない完璧な美人——周囲からそう評される美貌を、本人だけは「母や兄たちに比べたら平凡」だと思っている。

母によく似ていると言われても、兄たちのような華やかさはないし、人を惹きつける魅力もない。目立つことも好きではない。そんな性格が見た目に滲み出ている気がする。

「結婚するって話も出てるんだっけ？」

「ふふ、三十歳までに私をもらってって言うてあるから」

嬉しそうに言う芽衣に『男性と四六時中一緒に過ごさなければならぬ結婚のなにがいいの?』とは聞けない。羨ましさはないものの、大学時代にあんなことがなければ、きっと自分も人並みに恋に憧れていただろうな、と思うから。

葵と同じ年の芽衣は二十八歳。結婚式の準備期間を考えると、近々プロポーズされるだろう。

「葵は——」

「小早川さん、飲んでる?」

芽衣が言いかけたところで、斜め後ろに座る同僚、宮岡淳がビール瓶を片手に葵に声をかけてきた。歓迎会が始まってすでに二時間。すっかり酔いが回っている。

「ええ、いただいています」

穏やかに答えるものの、話に割って入られた苛立ちで、無意識に葵の眉間にしわが寄る。

宮岡は葵の四つ上の三十二歳で、中途採用のため社歴はまだ一年と、マネージャー職に就いている葵や芽衣よりも下。ただ、前職で大手広告会社に勤めていたからか、妙に自尊心が高い。口癖は「俺があつちにいた頃は」だ。

勤務中にも頻繁に絡んでくるし、薄気味悪い目でこちらを見つめてくる。他にも、自分でやるのが面倒な雑用を頼んできたり、なぜか先輩風を吹かせてランチを奢りたがったり。

こちらの冷ややかな態度に気づいているはずなのに、執拗に話しかけてくるため、葵はこの男が苦手だった。

「うちの会社、リモートが多いからさ。みんなで飲む機会ないんだし、そうツンケンしないで仲良くしようぜ」

「私がこうなのは、いつものことです」

にこりともせずと言っても、宮岡は気に留める様子もない。

「女は愛嬌がないと出世できないだろ。マネージャー止まりで終わるぞ？」

隣に座る芽衣も、宮岡のその言葉に眉を顰めた。後輩で、いまだ役職付きでもない宮岡には言われたくないだろう。

「それならそれで構いません。男性に媚びたいとも思いませんし」

「んなこと言わずにさっさと酔っ払って、その石みたいにながちなガードを緩めようぜ。俺が葵ちゃんに酌の仕方を教えてやるよ」

「名前で呼ぶのをやめてください」

瓶ビールをこちらに向けられ、葵は「けっこうです」とグラスに手を当てる。

「べつにいいだろ。同じ部署で仲良くするくらい。ほかに名前で呼んでる社員いるよな？」

宮岡が葵の隣に座る芽衣にちらりと視線を向けた。

芽衣は同僚だけれど、友人だから名前で呼び合っているだけだ。けれど、酔っている宮岡にそんな話をしたところで聞く耳を持つとも思えない。相手にするだけ時間の無駄だ。

「なあ、聞いてんの？」

「はあ」

無視をし続けて酔った宮岡に激高されるのは避けたい。さらなる面倒を回避するため、葵は仕方なく相槌を打つしかなかった。

「いやいや『はあ』じゃなくてさあ。ほら、そういうところだろ。ムスツとしてないで笑顔笑顔！なんなら俺が笑わせてやろうか？」

宮岡が葵の身体に手を伸ばそうとしてくる。

（なんの冗談！ セクハラまでするのっ!）

葵は宮岡の手を避けようと、その場で勢いよく立ち上がりバッグを掴んだ。

「どこ行くんだよ」

「化粧室です」

酔いが回っている宮岡も、さすがに化粧室に行く葵を引き止めはしなかった。

葵は芽衣にぐめんと目配せし、座敷を抜け出す。靴を履き、外の空気でも吸いに行こうと、こっそり店から出た。

このあたりは飲食店が軒を連ねており、金曜の夜ともなれば通りを歩く人も多い。葵が店の前で少し時間を潰していても、目立ちはないだろう。

外に立っていると自然と深い息が漏れた。酔っぱらった宮岡に言い寄られ、なんとか強気の姿勢で拒絶していたものの、本当はかなり腰が引けていたのだ。

（早く帰りたい……）

葵はもう一度ため息を漏らし、駅の方に視線を向けた。年に一度程度しか参加しないとはいえ、こういう日の帰りは億劫になる。

（リモートが多くて助かるし、仕事も好きだけど……ああいう人だけはちょっとね）

葵は宮岡に触れられそうになったことを思い出し、両腕をさすった。

大学卒業後、アドネットクラフトに就職した葵は今、六年目だ。

東京都新宿区に本社を置くアドネットクラフトは、大企業ADグループの子会社の一つで、インターネット広告事業を中心に行っている。

ADグループも創業三十年とまだ若い会社だ。グループ全体で年功序列制度を取り入れず、若手でも才能のある者に役職と権限を与えており、アドネットクラフトの社長も副社長も、複数いる取締役も皆、三十代である。

社員数は全国で千人ほどいるが、事業がほぼオンライン化されているため、リモートワークの地方在住の社員が多かった。

仕事はやりがいがあるし、月給も高く福利厚生も手厚い。売り上げや自分の評価がボーナスという形で還元されるためモチベーションも高くいられる。なにより無駄な通勤時間がない。

葵がこの会社に就職を決めたのも、リモートワークの多さが理由の一つ。通勤は週に一度程度のため、人付き合い——特に男性との関わりを面倒だと思っている葵にはうってつけだった。

ただ、四月に行われるこの新入社員歓迎会だけは、皆なるべく出席し、他部署の人間とも交流を図るように、というお達しがある。そうでもなければ、いつものごとくスルーしていただろう。

（社長も副社長もいらっしやるから、さすがに断れないし……）

それに、リモートで普段は直接顔を合わせないからこそ、飲み会を楽しみにしている社員も多い。苦手な男性社員に絡まれそうだから欠席します、とはさすがに言えない。

仕事が終わったら、葵の推しである声優、日下部潤（くさかべじゅん）のシチュエーションCD『先輩の初めてを俺にくださいⅡ』を聴こうと、一ヶ月も前から楽しみにしていたのに。

宮岡のせいで溜まった鬱憤（うつげん）を、潤さまで癒やすしかない。

（芽衣、ごめん……少（すこ）しだけ許して）

葵はバッグからBluetoothイヤホンを取りだし、耳に差し込む。すでにダウンロードはしてあるから、あとは専用アプリの再生ボタンをタップするだけ。

宮岡の興味がべつのところに移っていればいいが、芽衣に相手をさせていたら申し訳ないと思いつつ、五分でやめるから、と心の中で言い訳をする。

アプリの再生画面には、美青年がこちらをじつと見つめるジャケットが表示されている。楽しみすぎて、再生ボタンを押す指が震えた。

目を瞑（つぶ）ると、蕩けるほどの美声が頭の中にまで響いてくる。

『もう遅いし、同じ方向なんで送っていきます』

『なに言ってるんですか。俺が心配だから、送ってくつて言ってるの』

『だから……ったく、勘違いしてほしくて言ってるんですけど。ねえ先輩、俺の気持ちに、そろそろ気づいてくれませんか？』

リアルな三次元の男性が苦手な葵は、実のところ、声優と二次元の恋愛ものが大好きなアニメ系オタクだった。

ジャケットに写る美青年——タクミの隣を歩く自分を想像して、口元が緩（ゆる）みニヤニヤしてしま

いそうになる。早く家に帰って最後まで楽しみたいものだ。

(Ⅱも最高！ 早く誰にも見られずニヤニヤしたい……っ)

このシリーズのイラストを担当しているイラストレーターも神がかっており、ファン待望のⅡだといえる。興奮で涙の滲んだ目を軽く伏せて、あと少しだけと耳に届く音に集中する。

『ねえ……もう少し一緒にいたいんだけど。このまま俺の部屋に来ない？』

『なにもしないから、なんて言えない。来るなら覚悟してね』

『なんの覚悟って……わからない？ 帰したくなくなるってこと』

『誰にでも？ まさか！ 帰したくないなんて、先輩にしか言わないよ』

緩んだ口から「ぐふっ」と怪しげな声が漏れて、思わず口元を覆った。

葵は顔を赤らめ、周囲を窺う。

これ以上推しの声を聞いていたら、現実逃避から戻ってこれなくなりそうだ。

(芽衣が待つてゐるからもう戻らないと。あと一時間も我慢すれば解散だろうし)

葵はイヤホンを外しバッグにしようと、自分を落ち着けるように何度か深呼吸を繰り返した。戻ろうと店に足を向けたタイミングで、手に持ったままのスマートフォンが振動する。

歩きながらチェックすると、予想通りメッセージの送信相手は芽衣だった。

『さっさと戻ってきて、酔っ払いの相手、ほんと無理』

先程の宮岡の態度を思い出して、葵は急いで店に入った。

葵が戻ると、宮岡はすでにべつのテーブルの女性と話していた。胸を撫で下ろし、もう絡まれませんようにと祈りつつ元の席に腰を下ろす。

「ごめんね」

「遅いわよ」

芽衣が文句を言いながら、葵を見据えた。

逆のことをされたら葵も「早く戻って」と芽衣にメッセージを送るだろう。葵はもう一度、ごめんと芽衣に謝罪した。ストレス発散に潤さまの声を聞いていたなんて言えないが。

「化粧室が混んでて」

葵がそっと目を逸らしながら言うと、付き合いの長い友人はなにかに勘づいたのか、訝しむような目を向けてくる。

「そんなこと言って、愛しの潤の声でも聞いてたんでしょ」

「なんでわか……っ、ちよっと、こんなところで言わないでっ」

葵は彼女の口を慌てて塞ぐ。芽衣の声は喧噪の中でもそれなりに大きく響いていた。

芽衣は、オタクな葵に理解のある奇特な友人だ。出社は仕事帰りに二人で食事に行くことも多く、その際には葵のオタク話を呆れつつもすべて聞いてくれる。

周囲にオタバレしないように注意しているのを知っているはずだから、聞こえる声量で言ったのは葵への意趣返しだろう。

「まあ、さっきの見てたら癒やされたい気持ちはわかるけど」
「でしょう？」

そうだよ、と頷けば、芽衣に冷やかな目で睨まれた。

「葵は見た目と中身のギャップが激すぎるのよ。何人もの男を手玉に取ってそんな見た目でバリキヤリなのに、三次元の男はNGなんて。むしろ『オタクです』って言って回れば、あの人も引くんじゃないの？」

「何人もの男を手玉に取ったことなんてないし。でも、『オタクです』って言って回るのはいりか……だめ、痛すぎるでしょ」

「だから『鉄壁』だなんて呼ばれるんでしょうに」

「『鉄壁』と『オタク』なら、不本意だけど『鉄壁』を選ぶ」

ちゃんと仕事のやりとりはしているし、べつに無視しているわけでもないのに、男性相手にニコリともしない葵を揶揄して、守りが堅すぎる『鉄壁』だなんて。

「学生の頃の話聞けば仕方がないとは思うけど、元彼とか宮岡さんみたいな男ばかりじゃないってば」

芽衣の言いたいことはわかっている。過去のトラウマがあるからといって、男性に対して誰彼構わず警戒しなくても葵と思う。でも――

（やっぱりまだ……男の人には気を許せないよ。まあ、理由はそれだけじゃないけど）

葵は生身の男性が苦手になった原因を思い出し、目の前に置かれたグラスを手を取った。葵が席

を外している間に新しいドリンクを頼んでくれたらしい。

一口飲むと、それなりに酒精の強いカクテルだったのか、アルコールの味が口の中に広がる。

「芽衣の言う通りだと思うよ。ただね、今はリアルな男性に興味が持てなくなっちゃったの。リアルには、二次元から与えられる胸キュンと高揚感がまったくないっていうか」

潤さまは青年から上司まで幅広い役柄で人気を博しているのだが、葵は特に彼の演じる後輩もの――『先輩の初めてを俺にください』のヒーロー、タクミが好きだった。

可愛くて素直で、ちよつと腹黒いところもあるが、ヒロインだけを一途に愛している。そんなところがいい。身体の付き合いから始まったけれど、タクミは最初からヒロインに夢中。そんなタクミの気持ちに気づかない『私』にやきもきし、それでも先輩と後輩の垣根をなかなか取り払えず、ほかの男に奪われそうになったところで、タクミが行動に出る。

脳髓にまで染み渡る潤さまの甘い声で『帰したくない』などと言われたら。

（三次元の男がかっこいいと思えなくなるのも、当然っていうか……）

顔だけではない。行動とセリフがすべてイイ。二次元に勝るものはない。それに、絶対に裏切らないとわかっているから安心できる。

声を潜めてそう語ると、芽衣は呆れた顔でため息をつきつつも、「好きにすれば」と言った。彼女は葵のオタクトークなど聞き飽きている。

「人から言われてどうにかなるものでもないわよねえ。でも、そんなに潤の声が好きなら、あの人はないわけ？」

あの人、と言いながら芽衣が目を向けたのは上座だ。そこには、アドネットクラフトの社長と副社長の二人が肩を並べて座っていた。

「潤に声が似てるんでしよう？」

葵は社長、澄川^{すみかわ}の隣に座る副社長、吉良^{きら}湊斗^{みなと}をそつと覗き見た。
どこにいても目立つ男だと思う。

染められていない黒髪は真つ直ぐで、やや長い前髪は横に流すように整えられている。
前髪から覗く太い眉は凛々^{りんりゃ}しく、目元は涼やかながら男らしくキリツとしていた。高く真つ直ぐに通る鼻梁^{びなそう}、やや厚めの唇も、上品さを兼ね備えながら男らしい魅力をこれでもかというほどに溢れさせている。

葵の三人の兄たちもかなりの美形なのだが、その兄たちと張るほど——いや、兄たちを凌駕^{りやが}するほどの顔の良さだ。さらに言えば、体格^{たいく}もよく、身長は百八十を超えている。

そんな男がモテないはずもない。隣に並ぶ社長もまた目を瞞^{みは}るほどの美形のため、二人揃うとその強烈な存在感から目を逸らせず、思わず見入ってしまう。

（いつだったか、女性社員たちが、『彼らの隣に立つ勇氣のある女なんてそうそういない』って言ってたのも頷けるわ）

広告塔にもなっている社長の澄川は、様々なメディアに顔を出しており、彼女が百人はいると噂されている。そのサポートをする湊斗も似たようなものだろうというのが女性社員たちの見解だ。遊ばれるだけとわかっていて彼らに近づこうとするチャレンジャーは少ない。

「声が似てるからって、そういうのはないよ。まあ、いつも耳を澄ませちゃうけど」

葵は湊斗に意識を向けたまま、芽衣に視線を戻す。

彼の声は席が離れていてもよく通る。葵は歓迎会が始まってから、芽衣と話しつつも、ずっと湊斗の声に耳を傾けていた。

（やっぱり……そっくり）

低すぎず高すぎない甘いバリトン。同じ日本語を話しているとは思えないほどの発音の綺麗さ。淀みなく発せられる言葉を聞いているだけで、なぜだか安心できる。

似ているのは声だけだから、まさか血縁関係ではないと思うが、潤さまを推しだと豪語する葵ですら、この二人の声の違いがわからなくなるときがある。

「あの見た目にはなんの興味もなく、声だけが好きなんてね」

「見た目もいいとは思ってるけど、それはべつに……そもそも声だつて潤さまに似てるから好きなのだけだし」

兄たちで美形を見慣れているからか、リアルな男に興味がないからか、見目の良さに魅力をもったく感じないだけで。

「ほんと、あんたの世界は潤を中心に回ってるわ」

「ふふ、そうかも」

「じゃあもう、いっそのこと潤に好きですって手紙でも出してみたら？ 葵は美人だし、ワンチャンあるんじゃないの？」

呆れたように言う芽衣に、葵は苦笑を返した。

すぐに恋愛方面の話に持っていきたがるのは、芽衣がいい恋をしているからだだろう。

葵は潤さまを推しているが、交際したいかと聞かれたらNOである。

潤さまが出演するアニメ、映画は必ずチェックし、宣伝のために出演したラジオも追いかけている。イベントチケットを手に入れるため出演作の円盤は必ずゲット。金を惜しむことなくオタク活動につき込んでいるし、毎年、誕生日にはプレゼントと共に熱の籠もった手紙を事務所に送っているが、それは一ファンとして応援する気持ちからだ。

「ないってば。彼は、私の人生を豊かにしてくれた人っただけなの」

「ふうん、そんなもの？」

「そうよ」

ただ、『先輩の初めてを俺にください』のタクミなら……と思ってしまうオタクな自分が怖い。残念ながらタクミと付き合える日は一生来ないけれど。

そもそも葵は、リアルな男と交際したいとは思っていない。

恋愛ものの二次元ヒーローは、ただただ葵を甘やかして愛してくれるが、現実は違う。愛が憎しみに変わり、愛する相手を傷つけることもあると、もう知っている。

だから誰かと恋人関係になり、その相手に気を許すことが葵にはできない——
過去の弱い自分に引きずられそうになった瞬間、強い酒の匂いに現実を引き戻される。肩になにかがあたりそちらを向くと、酔って顔を赤くした宮岡がまたもやすぐ近くにいた。

「なあ、さつきからこそこそ、なんの話してんの？」

葵は周囲に聞かれないように芽衣の方に身体を寄せて話をしていたため、右隣が三十センチほど空いていた。宮岡はその隙間に膝を差し入れて、強引に割って入ってくる。

「宮岡さんには関係のない話です」

「またまたあゝ」

葵が冷やかな態度で言うが、宮岡は酒に酔った顔でニヤニヤと笑い、べつのテーブルから持ってきたジョッキを呷る。彼が話すたびに酒臭い息が漂い、ただただ不快だった。

「俺の噂話してたんだろ？ 葵ちゃんって、恋愛なんて興味ありませんって顔してんのになあ。なら、俺と付き合ってみる？」

「宮岡さん、だから名前呼びはやめてくださいって言ってますよね？」

「葵ちゃん、葵ちゃん、葵ちゃん」

宮岡はゲラゲラと笑いながら葵の名前を連呼する。酔っていてまともに話が通じない。

「飲みすぎだと思えますけど」

芽衣も窘めてくれたが、宮岡はまったく意に介さない。またかとうんざりするが、先程のように席を立てば、今度こそ芽衣に恨まれそうだ。

「お互い様なんだからいいだろ。恥ずかしがってないで、素直になれよ。可愛げないなあ。もしかしてベッドでは豹変するタイプか？」

お互い様の意味がわからない。酔っているのはお互い様という意味だろうか。きつと酔っ払いの

戯れ言^{わざ}だろう。

「それセクハラですよ。可愛くなくてけっこうです」

「酒の席での冗談だろ、セクハラだの、パワハラだの。ほんとうぜえ」

葵は宮岡をぎろりと睨みつけた。しかし彼は葵の苦言を軽く流し、さらに赤ら顔を近づけてくる。どうやらここに居座る気満々らしく、すでに葵の隣に腰を下ろしていた。

宮岡とこれ以上話をしたくなくて仕方なくグラスを空けていく。そこまで酒に弱くはないが、宮岡の隣にいただけで悪酔いしそうだ。

「さっき俺の話してただろ？ ツンデレも行きすぎると可愛くないぞ」

「……宮岡さんの話なんてしていません」

葵がなにを言っても聞いているのかいないのか、酔っ払った宮岡は勝手に自慢話を始めた。前の会社では課長だったとか、部下がどれだけいたとか、女にモテたとか、自分の指示で数億の金が動くんだったとか。本当にどうでもいい話ばかり。

（もうそろそろお開きの時間だと思うんだけど）

葵は五分置きに時間をチェックしてはため息をつく。グラスを空けたのと同時に宮岡から新しいグラスが手渡されて、すでに何杯飲んだのかわからなくなってきた。

宮岡の話を聞き流しながら、葵は現実逃避で湊斗の声に耳を澄ませた。芽衣はいえ、恋人とのメッセージのやり取りに夢中である。

「社長と副社長は二次会行かれます？」

「もう帰るよ。三十過ぎるとき、夜遅いのが明日に響くわけ。なあ、湊斗？」

「まあ……酒はほどほどに、の年齢だからな」

澄川の声のあとに湊斗の声が聞こえてくる。

湊斗の少し疲れたような声は、多分に色香を含んでいる。葵の好きなキャラであるタクミとは違うものの、これはこれでいいような気がして、葵はうつとりと目を細めた。

「ジジ臭いこと言わないでくださいよ、お二人ともまだ三十三歳じゃないですか！ 仕事も恋も楽しめる年齢ですよ」

楽しそうに話しているのは、同僚の男性社員だ。澄川も湊斗も経営者として厳しい面を見せることもあるが、年若いからか近づきがたさはない。

特に湊斗は、インターネット広告事業本部の長として、副社長という立場にしながら現場の陣頭指揮を執っており、葵も話すことが多かった。そのたびに彼の声に聴き入っているのは内緒だ。

もともとアドネットクラフトは、友人同士だった湊斗と澄川が大学在学中に^た起ち上げた会社である。

彼らは、ダイナミックリターゲティングの広告効果が高くなるように、AIに効果を予測させ最適な広告を選択するプログラムを開発した。その会社がADグループに買収され今に至る。

また、その頃に集めた人材がアドネットクラフトの経営陣に多くいて、年齢も若いため、皆、自分たちとそう年の離れていない二人に対して、酒が入るとつい気安い態度を取ってしまいがちだった。

「副社長って、そもそもどういう女性が好きなんですか？ 社長ですけど、二人とも別世界すぎて、芸能人の恋人がいるって言われても驚きませんよ」

「別世界ってそんな、普通だろう。澄川の近くにいますと、女性は全員こっちに寄っていくぞ」

湊斗の笑い声もまた潤さまにそっくりだ。

「湊斗は俺を隠れ蓑みにしてるだけ。うちの副社長は見た目で騒がれるの嫌いだからね」

「え、俺が副社長と同じ顔で生まれたら、遊び放題しますけど！」

「遊び放題ね……俺の性格的に無理だな。それなりでいい」

どうやら湊斗は一途なタイプらしいと、どうでもいい情報を仕入れる。いまだに自慢をやめない宮岡を視界に入れたくなくて、葵はどうとう耳だけではなく視線もそちらへと向けた。

「その顔で誠実とか、どこまでモテようとするんですか！」

「べつにモテたいと思って言ってるわけじゃないぞ」

湊斗が困ったように笑うと、彼を見る女性社員たちの目がうつとりと細まった。見目麗みめうるわしい男性に見蕩みとれる気持ちはわからないでもないが、葵は彼の外見よりやはり声に惹かれる。

あまりに凝視していたからか、ふいに湊斗がこちらを見る。

うつとりと彼の声を聴いていた気まずさで目を逸らすと、湊斗は腕時計を見て、声を張り上げた。「ほら、みんな、もう時間だから帰るぞ！ 幹事は精算してくれ。二次会の金も置いていくが、足りない分は自分たちで出せよ！」

澄川と湊斗が財布から金を出すと、社員たちは「あざまゝっす！」と揃って頭を下げた。

「もう帰る？」

「私は帰るよ」

「二次会、参加する人って決まってるんだっけ」

「予約しといたけど、まだ増えても平気！」

「ええ、どうしよう、じゃあ私も行こうかなあ」

そんな会話がそこかしこで聞こえてきて、皆が帰る準備をし始める。ハンガーに掛かったコートを取ったり、化粧室に行ったりと、一気に場が慌ただしくなった。

葵もテーブルに手をつき、立ち上がる。だが、バッグを持って歩こうとした瞬間、くらりと目眩めまいがした。頭もぼんやりするし、足元も覚束おぼつかない。

（ちよっと、飲みすぎた、かも）

あまり酔わないようにしようと気をつけていたものの、宮岡と話をしたくないあまり次から次へとグラスを空けてしまっていた。そもそも、そこまで酒に弱くないのに。

（宮岡さんが頼んだの、けっこう度数の高いお酒だったのかも……）

女性を酔わせて淫行に及ぶ男もいると聞く。宮岡ならやりかねないと考えて、その気持ち悪さにぞっとした。前後不覚になるほど酔わなくて本当に良かった。

「葵、なんかふらふらしてない？ 大丈夫？」

「ん……ちよっと飲みすぎちゃったみたい。でも、もう帰るだけだから大丈夫」

「そう？」

歩くたびに酔いが回り、頭がくらくらしてくる。目を瞑ればこの場で眠ってしまいそうだ。

電車の中で寝て、乗り過ぎないように注意しなければ。帰ってから『先輩の初めてを俺にくださいⅡ』を聴こうと思っていたが、この調子では無理だろう。

葵は靴箱からパンプスを取りだし、ふらつきながらもなんとか足を通し、店を出た。

同僚たちは二次会に向かう人を集めているのか、まだ店の前にいる。

「あ、社長たちに挨拶してから帰ろう」

「ああ……うん」

芽衣の言葉に頷きを返した葵は、そこかしこの集団の中から、澄川と湊斗の姿を捜した。

背の高い二人は見つけやすくて助かる。

「社長、副社長」

呼びかける芽衣に気づいたのか、澄川と湊斗がこちらに目を向けて、軽く手を上げた。葵と芽衣は早足に二人のもとに向かう。とはいえ、葵はふらつきながらだが。

そのとき、湊斗から一メートルほど離れた場所に立つ宮岡と目が合った。こちらをじつと見てくる宮岡の目に得体の知れない恐怖を覚え、葵はさっと顔をそらす。

「今日はごちそうさまでした」

芽衣と揃って頭を下げると、湊斗がいやと頭を振った。後ろを歩いていた澄川はべつの女性社員に捕まってしまったが、湊斗にだけでも挨拶しておけばいいだろう。

「二人とも二次会には行かないのか？」

湊斗に聞かれて、葵と芽衣は同時に頷く。

宮岡に絡まれ辟易した飲み会がようやく終わり気が抜けていたのか、はたまた酔いが深まっていたからか、間近でうつとりと彼の声を聴いた葵は腰が抜けそうになった。つい、ふらりと湊斗の方へ倒れ込んでしまう。

「大丈夫か？」

「あつ……すみません」

肩を支えてくれたのは湊斗だ。葵は慌てて身体を起こし、頭を下げた。だが、頭が揺れるとよいに酩酊感が強まり、目の前がぼやけてくる。

「葵、ほんとにふらふらしてるけど、大丈夫？」

「ん……大丈夫……」

言ったそばから足元がふらつき、慌てた様子の芽衣に身体を支えられた。

自分では足を踏ん張って、しっかり立っているつもりだったのに。

「大丈夫じゃなさそうね」

「そういえば、けっこう飲んだな」

自分たちを近くから見下ろしていた湊斗が口を挟む。見られていたのかと決まりの悪い気持ちになりつつも、上司の前で醜態を晒さないように葵は口を開く。

「かりやまれて、仕方にやく……なかつたんです」

自分では『絡まれていて仕方がなかつたんです』と言ったつもりだったが、いよいよ呂律が回ら

なくなってきた。すると、湊斗がなにかを察したように「ああ」と小さく言った。

「小早川さんはたしかJRだったか。俺も同じ方向なんだ。もう遅いし、途中まで一緒に帰ろう」

『もう遅いし、同じ方向なんで送っていきます』

突然、脳内に『先輩の初めてを俺にくださいⅡ』のタクミの声が響いた。大好きな潤さまの声を間近に聴いている感覚に包まれ、葵は無意識に頬を緩ませる。

「はあい、嬉しい……れす」

甘ったるい声で返事をする、湊斗は心底驚いた顔をして葵をマジマジと見つめた。

「小早川さん？」

湊斗が腰を屈めて顔を覗き込んできた直後、葵は我に返った。

（違う……これはタクミじゃない……えっと、副社長……？）

酔いのせいで霞む目を手の甲で擦る。目の前に立っているのは、自分の上司であり副社長である湊斗で間違いない。

酔った様子の自分を心配して、一緒に帰ることを申し出てくれたのだろう。一瞬、脳内で再生された『先輩の初めてを俺にくださいⅡ』のセリフと混同してしまった。

「葵……ほんと大丈夫？」

案じるような芽衣の声が聞こえてくる。

「芽衣は彼氏が……早く行かにやいと、心配しゆりゆよ」

そう答えると、二人はまるで残念な子を見るような顔をこちらに向けた。

自分ではしっかり話しているつもりだったのに、うまくいかない。しかも、ますます目眩めまいと眠気がひどくなってくる。

「これは……完全に酔ってるな。同じ方向だし、やつぱり俺が送るよ」

「すみません。本当なら私が送るべきなんですけど」

「いや、約束があるんだろう。大丈夫だから」

「ありがとうございます、副社長。よろしくお願いします」

湊斗と芽衣がそんなふうに話をしていたが、葵はふらふらと頭を揺らしていたので気づいていなかった。

ふと、帰りの電車が気になり、葵はスマートフォンを取りだし電車の時刻を調べ始める。

（電車は十五分後……どうしよう、立ったまま寝そう）

スマートフォンをバッグにしまい駅に向かって歩きだすと、隣を歩く男の姿に気づく。

「ん？」

葵は、自分がどうして湊斗と一緒に歩いているのかわからず首を傾げた。

「あの？」

「送っていくと言っただろう。もう忘れたか？」

そんな話が聞こえたような、そうではないような。

「そう、でしたか……」

葵はふわふわとした夢心地のまま、訳もわからず頷いた。

「とりあえず駅に向かうぞ。歩けるか？ 座らせてやりたいが……この時間だと無理だろうな」

耳を蕩かすような潤さまの声。ため息交じりの吐息。

これが夢なのか現実なのかさえ判断がつかなくなってくる。

もしかしたら、もうとつくに家に帰っているのだろうか。そしていつものようにベッドに寝転びながら潤さまの声を聞いて、眠るところなのかもしれない。

今日は楽しみにしていた『先輩の初めてを俺にくださいⅡ』を聴こうと思っていたのだから。

(そうだよね……やつぱりこれはタクミの声なんだ)

葵が目をつ瞤つゝつてそのまま寝入りそうになると、慌てたように誰かに腕を掴まれた。

「……つと。大丈夫か？ これじゃあ電車に乗るどころじゃないな。タクシーで帰ろう。俺の腕に掴まってくれるか？ その方が支えやすい」

俺の腕に掴まって——なんていいシーンなんだろう。タクミは“私”を家まで送り、そのま
ま……

脳内の妄想に頬を緩ゆるませつつ、葵はすぐ近くにある太い腕に掴まった。

「酔っているからだろうが……そこまで隙を見せるなんて、普段の君からは考えられないな」

タクミの腕が葵を支えるように背中に回った。夢にしては男性の腕の感触が妙にリアルだ。

「すき？」

隙を、好き、と脳内で変換した葵は、口元を緩ゆるめた。もう一度タクミの口から「好き」と聞きた
いが、早戻しのボタンはどこだろう。

「仕事をしているときとギャップがありすぎて、どういう態度を取っていいかわからなくなる
な……。酔いが醒めたら覚えてないかもしれないが、君は可愛いんだから、男にはもつと気をつ
けて」

「可愛い？ 嬉しい」

葵はふわりと笑い、隣を歩く男の腕に顔を寄せた。

通りを走る車の音が聞こえる。雑踏にある人々の声の中、葵は彼に支えられながら一歩ずつ歩い
ていく。

自分が外にいるのか、ダウンロードしたCDをベッドで聴いているのかもわからないまま。

「でも、どうせ、ほかの人にも同じように言ってるんでしょ」

そんな風に拗ねながらも、“私”はタクミからの否定の言葉を待っている。

後輩としてずっと“私”を陰で支えながら想い続けてきたタクミは、ある夜“私”が仲のいい同
期と親しげに話しているのを見て嫉妬するのだ。

そして“私”は、嫉妬した彼にお持ち帰りされてしまう。

「どうだろうね。そんな風に言われたら、男は勘違いするよ。気をつけた方がいい」

なんていい声なんだろう。耳元で囁ささやくように告げられて、キウンが大爆発を起こす。気持ちたかみちが昂
り、思わず掴んだ腕に頬を擦り寄せると、その腕がびくりと震えた。

（ん？ でもなんだか……話し方がタクミとちよつと違う……？）

男は勘違いするよ——なんてセリフはタクミが言いそうなものではあるが、ちよつと大人っぽいのではないか。若干キャラブレを起こしている気がする。

そうは思ったものの、葵はまあいいかとその違和感に蓋をして、タクミの言葉に耳を傾けた。

「やっぱり金曜の夜はタクシー待ちが多いな。立っていられるか？」

「ん〜大丈夫う」

「酔ってるやつはだいたい大丈夫って言うんだが、君もか。足元がふらついてる。家は平塚だったよな？」

「ん……」

「俺が同じ方向で良かったな……歓迎会の参加者は都内在住が多いから、一緒の方面に住んでいる社員は少ないし」

うつとりとタクミの言葉に耳を傾けていると、小さく笑われる。

「ここで寝られると困るんだが……もう限界だろう？」

「大丈夫だって、ばあ」

葵がそう言うと、彼は「酔っ払いの大丈夫は信用ならない」と笑った。そして背中に回された腕の力が強まる。

「本当に、いつもと違いすぎて困るな」

彼はため息交じりにそう言うと、逡巡するように押し黙ってから続けた。

「……送っていくと言ったの、迷惑じゃなかったか？」

「迷惑、なんて……そんなわけ、ない」

送ると言ったタクミにお持ち帰りされる——これは、そういうストーリーなのだから。

「そうか、ならよかった。小早川さんがその気だったら邪魔をしてしまったかと」

「その気？」

小早川さん、と呼ばれたことで、酩酊状態にある頭がいくらか冷えた。自分は今、なにか盛大な勘違いをしているのではないかと。

「飲み会中の宮岡だよ。君にあんなに飲ませて。中には度数の高い酒もあったんじゃないか？ 酒の勢いで関係を持つとうとするなんて、褒められた行為じゃないだろう？」

「宮岡、さん……？」

宮岡の名前が出たことで、葵は己が顔を寄せている男の腕が誰のものなのか、凝視して考えた。そしてゆっくりと顔を上げていく。

（なんで副社長……っ？）

目眩にも似た感覚が絶え間なく押し寄せながらも、徐々に冷静さを取り戻す。そうだ、上司である湊斗が、酔った自分を心配し送っていくと言ってくれたのだった。

こちらを見ていた湊斗と目が合う。間近で彼の顔を見て、あまりに美しすぎるその容姿に息を呑んだ。兄たちで美形を見慣れているはずなのに、見蕩れてしまったのはなぜだろう。

「どうした？」

「あ、いえ……宮岡さんのこと、どうして」

湊斗はどうして葵が宮岡に絡まれていると気づいたのだろう。席も離れていたのに。

「君を見ていたからな」

「え……？」

なぜ葵を見ていたのか聞きたかったが、湊斗の話は続く。

「助けてやれなくてすまなかった。今日はずいぶんグラスを空けてるし、いつもより君の警戒心が薄い気がして心配だったんだ。合意の上なら構わないが、宮岡があそこまで酔っていると正常な判断ができない可能性もあるから。送ると声をかけてよかったよ」

宮岡が近くに立ってこちらを見ていたのは、やはり酔っている葵をどうにかするつもりだったのかもしれない。ただただ苦しい気持ち湧き起こる。まさか葵の想像が当たっていたなんて。あらためて湊斗がそばにいてくれてよかったと思った。

「……小早川さん、君もだよ」

すると腕を組んでいた方の湊斗の手が、葵の手に重なる。

手のひらに指を絡められるが、湊斗がなにをしたいのか、なにを言いたいのか、よくわからない。葵と手を繋いだまま、正面から見据えた湊斗の反対側の手が、葵の頬に伸ばされる。あと数センチで頬に触れるところで、彼の手はすっと下ろされた。

「ほらね」

「ほら？」

「いつもの君なら、男に送ると言われても断っているし、触れられそうになったら避けるくらいはするはずだ。ましてや、こうして手を繋ぐことなんて絶対にしないだろう？」

「あ……」

繋いだ手を持ち上げられて初めて、自分が上司である湊斗と手を繋いでいることに気づいた。驚いて手を離そうとすると、背中に戻された腕の力が強まる。

「離さないでいい。立ってられないだろう？」

まるで抱き締められるかのように身体を引き寄せられて、湊斗の胸元に顔が埋まる。現実ではあり得ない出来事に、まだ夢うつ状態なのか疑ってしまう。

心臓がどつどつどつとうるさいほどに頭の中で音を鳴らす。

「宮岡が好きなわけじゃないんだな？」

囁くような湊斗の声が耳の近くから聞こえてくる。葵は質問の意図がわからないながらも頷いた。

「は、はい」

どうして今、自分は湊斗に抱き締められているのだろう。

やはりこれは夢だろうか。それを確かめるべく恐る恐る顔を上げると、照れたような顔で深くため息をつく湊斗の姿があった。

「俺も宮岡のことは言えないな……」

湊斗の指先が頬を掠めた。葵が苦手とする男性の手なのに、彼の声に聞き入ってしまったているのか、それとも酔っているからなのか、その手を拒絶できない。

「送っていくと言ったが、もう少し……小早川さんと一緒にいたくなかった。小早川さんさえよければ……俺の部屋にこないか？」

『ねえ……もう少し一緒にいたいんだけど。このまま俺の部屋にこない？』

湊斗の声とタクミの声が脳内で見事なアンサンブルとなる。

まるで『先輩の初めてを俺にくださいⅡ』の続きを聴いているようではないか。上司である湊斗が下心ありきで葵を部屋に誘っているように聞こえてしまう。

勘違いとも思ったが、湊斗の目に籠もる欲望に気づいた。

葵の喉が小さく鳴り、乾いた唇を軽く噛んで唾液で濡らす。

「いやだったら断っていい。無理強いするつもりはないから忘れてくれ」

「いや、じゃ、ないです」

感情をこらえるように言われ、葵は悩む間もなくそう返していた。

いつもの自分なら、相手が上司であろうと同僚であろうと、齒に衣着せず断ったはずだ。そうしなかったのは、酔っていて正常な判断ができなかったからだ。きっとそうに違いない。

身体を離されて、湊斗の香りが薄れていく。なんだかそれがひどく寂しく感じるのはなぜだろう。

葵が見上げると、彼は嬉しそうに、それでいて照れくさそうに笑っていた。

「そうか」

繋いだ手が軽く引かれ、湊斗が手を上げてタクシーを停める。彼に促され車に乗り込むと、タク

シーはすぐに発進した。

「保土ヶ谷方面に向かってください」

タクシーのエンジン音と振動が身体に伝わってくる。どうして彼の誘いを受けてしまったのだろ

う。混乱しながらも、拒絶の言葉が出なかったのはどうしてか。

もしかして夢かもしれない。そう思うたび、彼の手のひらの熱さがこれは現実だと伝えてくる。

酔いが回ったせいであらうとらうとらうとして、時々繋いだ手が動かされ、そのくすぐたさに

指先がぴくりと震えた。

「そのあたりで停めてください」

どれだけの時間が経ったのか、耳心地のいい声が聞こえて意識が浮上した。

後部座席のドアが開くと、目の前にはカースペースが二台ある一戸建てが建っていた。このあたりは住宅街のようだ。

（ここ、副社長の家？）

タクシーを降りて家を眺めていると、手を引かれてその一戸建ての家に連れていかれた。

「どうぞ」

湊斗はドアを開け、ぼんやりと立ち尽くしている葵の手を引く。玄関に足を踏み入れると、玄関

の明かりが自動でついた。

「お邪魔、します」

33 副社長の愛の囁き（イケボ）に蕩けそうです

湊斗は、のろのろと靴を脱ぐ葵を待つてくれている。倒れないように心配してくれているのか、靴を脱ぎ終わるとまた手を取られた。

面倒見がいい上司だとは思っていたけれど、プライベートでも変わらないらしい。

「水分を取った方がいいな。ここに座ってて」

リビングに入ると、湊斗は葵をソファアに座らせて、キッチンに行った。

葵は二十畳ほどのリビングを見回した。リビングはがらんとした雰囲気、テレビとソファア、小さなローテーブル、二人用のダイニングテーブルしか置かれていない。

葵を連れてくる予定などなかったはずなのに、綺麗に片付けられている。見た目を裏切らない性格なのかもしれない。実はオタクな葵とは大違いだ。

「ただの水しかなくて悪い。飲めるか？」

キッチンから戻ってきた湊斗の手には、ミネラルウォーターのペットボトルとグラスが握られていた。湊斗はペットボトルから水をグラスに注ぎ、葵に手渡す。

「ありがとうございます」

実のところかなり喉が渴いていたのでありがたい。グラスの水を一気に飲み干すと、空のグラスに新しい水が注がれた。それを半分ほど飲む。

「もつと飲むか？」

「いえ……もう平気です。すみません……酔って、ご迷惑を」

「言っておくが、いくら部下が酔っていても、家になんて連れて来ない」

熱の籠もった目で見つめられて、一気に密度が増したような空気に包まれる。

（酔ってるからって……私どうしてここに来たんだろう。こんなふうに流されるなんて、あり得ない）

湊斗とそうなってもいいと受け入れている自分に驚き、背中がじつとりと汗ばんでくる。

「もう少し一緒にいたいと言ったよな。いやだったら断っていいとも。断られたら、君だけをタクシーに乗せて帰らせるつもりだった。上司としてな」

今は上司ではない、そんな口振りだった。

重ねられた手がゆつくりと動かされて、グラスが奪われる。残っていた水を湊斗が飲み干し、空になったグラスをテーブルに置いた。

葵が口をつけたグラスに彼も口をつけた。ただそれだけなのに、水で濡れた湊斗の唇がやたらと艶めかしく思えて、葵の胸に動揺が広がる。

「今は、上司じゃ、ないんですか？」

「さあ、どうだろうな」

意味深な言葉を聞いて、こくりと小さく喉が鳴り、頬に一気に熱が集まってくる。

「ただ……君を帰したくなかったんだよ」

赤くなった頬をくすぐるように撫でられて、片方の手に指を絡ませられた。

（……なんだか、おかしくなりそう）

リアルな男になんて興味はない。それがどれだけ美形だろうが、受け入れるつもりなんてないの

に、なぜか彼を拒絶する言葉が出てこない。まるで催眠術にでもかけられたみたいだ。

わずかに残る理性が断るべきだと言ってくるのに、頭の中に彼の声が反響すると、思考が鈍りなにも考えられなくなる。

（帰したくなかった……なんて）

もっとその声を聞かせてほしい。そんな思いに駆られて、胸が沸き立つ。

（潤さまと同じ声だから、なの？）

酔っているからなのか、それとも『先輩の初めてを俺にください』と同じシチュエーションに煽られているのか、自分でもよくわからなかった。

「帰さないで……なにをするんですか？」

葵が恐る恐る見上げて聞くと、湊斗はふつと笑った。

あえて言わせようとしていることに湊斗も気づいたのだろう。葵は彼の口から「抱きたい」という言葉を聞きたかったのだ。

「そんな風に聞かれたら期待するぞ。君がいやだと言えば、なにもしないつもりだったのに」

葵を見る湊斗の目が細まり、劣情を孕む。

そんな彼に煽られたかのように、葵の胸が早鐘を打ち、コントロールのできない熱が身体の奥深くで渦巻く。湊斗が発する異様な熱に囚われてしまったのか、これから自分をどんな風に抱くのか、教えてほしくなる。

「君……じゃなくて、名前がいいです」

葵が呟いた言葉に、湊斗が小さく息を吞む。

「私の名前を呼んで」

大好きな人の声で名前を呼ばれたら、天にも昇る心地に違いない。けれど、目を伏せようとは思わなかった。自分の名前を呼ぶ湊斗を見たかったのだ。

「葵……あまり俺を困らせなくてくれ。君を抱きたくてたまらなくなる」

潤さまと同じ声なのに、それが目の前の上司の口から発せられているからか、推しの声とも少し違ったように聞こえる。

「嬉しい、もっと」

ねだるように湊斗を見上げれば、なにかを我慢するように彼が口元を手で覆った。伶俐さの滲む彼の美貌にますます熱が籠もる。

「葵が好みすぎて、困る」

そう言われた直後、指を絡ませたまま、ソファーにゆっくりと押し倒された。端正な湊斗の顔が近づいてきて、キスの予感に葵はゆっくりとまぶたを伏せる。

ちゅつと軽い水音が立ち、すぐに唇が離れていく。ほつとするような残念なような複雑な気持ちで彼の唇を目で追うと、少し開いた唇の隙間を舌で舐められた。

「反応も可愛いな。今度はもっと深くさせて」

葵がいやがっていないことを確信したのか、今度は先程よりも性急に唇を重ねられた。

「ん」

熱を持った舌が唇の隙間から差し入れられた。頬を撫でていた指先が、首から肩をなぞっていく。ぬるりと滑る舌先に唇の裏側や歯茎を舐められて、湊斗の声に反応しすでに興奮しつつあった身体がさらに熱を持ち始める。

「はあ……ふ」

口腔をくちゅくちゅと音を立てて舐られる。時々、唇の隙間から漏れる湊斗の息遣いがやたらと色っぽくて、その声にさらに興奮してしまう。

彼の声を聞くために、なるべく自分は声を上げないようにと我慢していると、肩を撫でていた手のひらが服の上から慎ましい胸元を包んだ。

「我慢しないで。俺は葵の可愛い声が聞きたい」

薄手のシャツは彼の手の動きを生々しく伝えてくる。優しく乳房を揉みしだかれ、ブラジャー越しに頂を撫でられた。

「はう……んっ、ん」

その間もキスはやまない。葵の舌を搦め捕り、舌ごと唾液を吸われて、くちゅ、じゅつと卑猥な音が室内に響く。

下着越しの愛撫を焦れつつも思っていると、汗ばんだ手のひらがシャツを捲り上げ、ブラジャーのホックを外した。ふろりと揺れる乳房が直に掴まれ、先程よりも強い力で揉みしだかれる。

「柔らかくて、気持ちいい」

興奮しきった湊斗の声に、腰がずんと重くなる。足の間がじわりと濡れて、もう引き返せないほ

どに身体が熱くなっていた。

葵は湊斗の腕を軽く掴み、熱に浮かされた目で見上げる。

「どうした？」

愛おしい声で囁かれると、些細な疑問などどうでもよくなるほど幸せな心地に包まれた。今のときだけは彼に愛されたくて、抱かれたくてたまらなくなる。

「もつと……もつと、名前、呼んで、ほしいです」

ねだるように言えば、湊斗が辛そうに眉を寄せた。その理由がわからずにいると、囁くように耳に口を近づけられる。

「あまり可愛く誘われたら、葵を気持ち良くしてあげられなくなるよ。余裕ぶってるだけで、本当はもう、挿れたくて仕方ないんだ」

「んっ」

わかるだろうと言うように、熱を持った身体に硬いものを押しつけられて、葵の腰が小さく浮き上がった。スラックスの中で張り詰めた彼のものが、布地を押し上げている。

葵はこくりと喉を鳴らし、うっとり目を細めた。

彼の汗ばんだ手のひらがますます淫猥に動かされて、ついに乳首を捉える。きゅつと軽く摘み上げられると、そこからじんとした甘い痺れが生まれ全身に広がっていく。

「ん、あっ、そこ、だめ」

腰が震えるような快感に襲われ、葵は咄嗟に彼の腕を掴んでいる手に力を込めてしまう。

「乳首が弱いのか？ それともさわられたくない？」

葵がだめだと言ったからだろう、湊斗が指の動きを止めて聞いてくる。ただ、彼の言葉は試すような響きをしていて、あえて葵に言わせようとしているかのようだ。

「ち、が……やつ、恥ずかしい、んです」

「恥ずかしいから、なに？ やめる？」

身体を昂^{たかふ}らせるような淫らな言葉にどこまでも翻弄^{ほんろう}される。上司でしかなかった湊斗の、男としての一面を見せられて、なにもかもを忘れて受け入れたくなる。

女としての自分の本능が欲望^{あか}を露^{あらわ}わにし、自分を欲^ほしがる彼の声を聞きたいと言ってくるのだ。

「や、やめないで、ほしいです」

葵がそう言えば、湊斗がうっとりとするほど綺麗な微笑みを返す。

その顔に見^み蕩^とれたのは一瞬。乳首をきゅつと摘まみ上げられて指の腹で捏^{つま}ねられ、理性ごとどこかに流されてしまう。

「あつ、あつ」

「脱がすよ」

スカートのホックを外され、足から引き抜かれる。ストッキングが伝線しないように丁寧に下ろすその手つきが、やたらと手慣れていた。

「こういうこと、私以外にも、たくさんしてるんですか？」

つい尋ねてしまったのは嫉妬に駆られたからではない。湊斗の声で「葵だけだ」と言ってほし

かったのだ。たとうそだとしても、葵がほしい言葉をくれるのではないかという期待もあった。

湊斗はストッキングを脱がす手を止めないまま、葵を見つめて口を開く。

「これからは、葵にしかない。それに、自分から好きになったのは君だけだ」

「好き？」

湊斗が自分を好きだなんてあるはずがないから、リップサービスだろうか。酔いが回り、聞き間違えただけかもしれない。

先程までただの上司と部下だったのだ。急にそんな感情が芽生えることはないだろう。それは葵も同じだ。

それでも、もつともつと湊斗の声に包まれていたい。ただ、己^{おのれ}の本능が彼を求めている。自分に向けられるこの声に、胸が沸き立ってしまうのを止められなかった。

「ああ、好きじゃなきゃ、こんなことをしない」

「ん……っ」

昂^{たか}った肉棒をふたたび腰に押しつけられて、葵の口から甘やかな吐息が漏れた。無意識に腰をくねらせ、上げた膝が開いてしまう。

「触れてないのに、もうこんなに濡れてるのか」

劣情を孕んだ目が葵の足の間を凝視している。

「見ないで、ください」

「それは無理だろう」

湊斗は小さく笑うと、興奮しきった顔を隠すことなく、片方の手でベルトを外して前を寛げた。隙間から見える下着の一部が色を変えている。彼のものはありありとその形がわかるほど、下着の中で窮屈そうにその存在を主張していた。

濡れたショーツが足から引き抜かれると、秘めた部分を目を凝らすように見つめられる。

「たくさん可愛がって、達かせてやる」

普段見ることのない獰猛な表情を浮かべた上司がそこにいた。この美貌でどれだけの女性を虜にしてきたのだろう。

足の間に近づいてくる顔をぼんやりと眺めながらそんなことを考えていると、ぬるりとした感触が伝わり、鋭い快感が全身を駆け抜けた。

「ひあつ、あつ……やあつ」

熱を持った舌で花弁をぬるぬると擦り上げられ、溢れる愛液をじゅつと啜られると、腰が砕けてどうにかなくなってしまいそうになる。

男性と関係を持つのはずいぶんと久しぶりだ。それに、過去に一人だけいた恋人とのセックスとはまるで違う。初めての感覚に衝撃を受ける。

「あつ、ん、それ、だめえつ、だめつ」

いやいやと首を振り、湊斗の髪に指を絡ませると、足の間から彼が顔を上げた。濡れた口元がいやらしくて直視できない。

「気持ち良くないか？ 強すぎる？」

「ち、がつ、それ……変に、なりそ……なの……つ」

葵が涙を浮かべて言うのと、湊斗の口の端が緩やかに上がった。

「達かせてやると言っただろう。たくさん変になつていい」

湊斗はそう言つて、ふたたび葵の股間に顔を下ろすと、ますます淫猥に舌を這わせた。褻を広げながら、愛液の溢れる蜜口からつんと勃ち上がる淫芽まで舌で擦り上げてくる。

「ああっ！」

これでは彼の声にうつとりと聴き入るどころではない。

舌が動かされるたびに、腰から迫り上がってくる凄絶な快感に全身が支配されていく。意識が陶然とするほど気持ち良くて、腰が勝手にがくがくと揺れてしまう。

「舐めても舐めても溢れてくる。感じやすいんだな」

湊斗は敏感なクリトリスを口に含み、舌を小刻みに動かした。くちゆくちゆと、彼の唾液と己の愛液がかき混ぜられる音がして、あまりの羞恥に全身が熱くなる。

「あう……っ、ん、気持ち、よすぎて、だめになっちゃう」

いやいやと髪を振り乱しながらも、葵は気づくと湊斗の顔に押しつけるように腰を浮き上がらせていた。彼の髪をぐしゃぐしゃにかき乱し、身悶える。

「いいよ。気持ち良くなつてるところを俺に見せてくれ」

湊斗の舌の動きがいつそう素早くなる。ざらついた舌を動かしながら、時折、腫れた淫芽を強く吸い上げられて、激しい快感に襲われた。

「ああっ、だめ、恥ずかし、から……っ」

みだりがわしい声を抑えることもできず甲高く喘ぐと、閉じた陰唇に指が這わされ、愛液にまみれたそこをぬるぬると擦られた。

「恥ずかしいなんて言うのと、男をより興奮させるだけだぞ」

「あっ、あ……擦っちゃ、や」

全身がかあつと熱くなり、腰がぐくぐくと震えて止められない。さらに、上唇と舌で挟んだクリトリスを巧みな動きで扱かれ、蜜口から大量の愛液が溢れ出た。

「ひああっ、もうっ……それ、だめえっ」

秘裂を擦る指先で蜜口の浅いところをかき混ぜられて、同時に敏感な淫芽を舐められる刺激に耐えきれず、葵は背中を仰け反らせながら悲鳴のような声を上げた。

足の間からは引つきりなしにじゅぶじゅぶと卑猥な音が響き、その音に煽られるかのように淫らかな感覚が増していく。

「音……やあっ」

いやいやと髪を振り乱しながらそう叫ぶものの、湊斗を求める身体は正直で、男の指を咥え込む媚肉が気持ちいいとばかりにうねった。

「今、中がきゅうって締まった。一緒にするのは、気持ちいいか？」

湊斗は花芽にねつとりと舌を這わせたまま、脚の間から顔を上げずに言った。彼の口から漏れる息遣いにさえ感じ入ってしまった、葵は全身を真っ赤に染めて目を潤ませる。

「気持ち、い……っ、あああっ」

「いいね、素直で可愛い」

潤さまに似た声で「可愛い」と言われると、それだけで下腹部の奥が切なく疼く。もつと気持ち良くてほしいと身体が求めているかのようなのだ。

そんな葵の反応を見てか、蜜穴の浅瀬をかき回していた指が、より深く差し入れられた。指が増やされたのか、体内の圧迫感も増す。

「ほら、もつと気持ち良くなってる」

隘路を広げるように指を小刻みに揺らされ、蜜襞を擦り上げられる。滲み出た愛液が摩擦をなくし、指を抜き差しされるたびに愛液が泡立つ音が響いた。指を根元まで突き挿れ、深いところをあますところなく擦り上げられ、舌先でくりくりと淫芽を突かれ続ける。

「ん、ああっ、指……も、それ、気持ち、いい」

葵は途切れがちに声を漏らし、背筋を波打たせた。彼の指の動きに合わせて腰がびくびくと跳ね上がり、媚肉が淫らに蠕動する。開いた脚が痙攣し、宙で揺れ動く足の先がぴんと張った。

「ここ？ ああ、本当だ。指を動かすと、抜かないでほしいってひくひくして締めつけてくる」

湊斗はそう言いながら、葵の感じやすいところを幾度となく擦り上げた。執拗に同じところを愛撫されて、次から次へと鋭い快感が迫り上がってくる。

「ふあ……っ、ああっ、そこ、そこ、だめっ」

指を小刻みに揺らされ、ぴんと勃ち上がるクリトリスを唇と舌でこりこりと扱かれた。

引きも切らずに凄まじい快感に襲われ、意識がどこかに引つ張られそうになる。葵を追いつめるかのように、舌と指の動きが速さを増し、あまりの快感に目の前が涙で滲んだ。

「あああつ、もう……もう……っ」

葵はいよいよと頭を振り、苦しい声を漏らした。

このままでは、過ぎる快感に、全身が蕩けてなくなってしまう。下腹部の奥が痛いほどに疼き、理性をかなぐり捨てて、本能のままに彼を求めたくなる。

結合部から漏れる愛液が尻を伝いソファを濡らす、肌にじつとりと張りつくような不快さも気にならないほど、全身が快感に支配されていた。

「おねが……っ、あつ、もう、なんか、きちゃ」

「もう達きそう？」

「ああつ、達く……達くうっ」

媚びるような甘い声が室内に大きく響く。

大きな快感が波のように何度もやって来て、なにかがぱちんと弾けそうな気配がする。

葵は腰をくねらせながら髪を振り乱し、湊斗の頭をぐつと掴んだ。手も足も、みつともないほどぶるぶると震えている。

「いいよ、ほら、達って」

ひととき強く花芽を吸われ、じゅつと卑猥な音が立った。同時に、絶妙な指の動きで感じやすいところをぐりぐりと擦り上げられて、凄まじいまでの喜悦に全身が硬直する。

「——っ！」

身体の中から与えられる凄絶な刺激に息が詰まり、官能の深い渦に吞み込まれ、葵は声も上げられないまま絶頂に達した。

頭が真っ白になり、下腹部の奥が痛いほどに収縮する。背中が波打ち、腰がびくびくと震えて、中に入った彼の指をぎゅうつと締めつけてしまった。

「あつ、あ……はあつ」

一気に深く息を吸い込み、吐くと同時に脱力する。気怠さに襲われ動けずにいると、汗がじわりと滲み出て肌を濡らした。

「葵の達ってるときの顔、可愛いな」

達した直後の敏感な身体は、彼の甘い声にまた反応を示す。

湊斗は身体を起こし、葵の髪を軽く撫でた。

「ちょっと待っていて」

彼は乱れた格好のままソファから下りると、収納棚を開けてなにかを取りだし、すぐに戻ってくる。彼の手には避妊具が握られていた。

小さな袋を器用に破り、下着をずり下げる様をじつと見てしまう。葵の視線に気づいたのか、湊斗は苦笑を漏らし葵の片脚を持ち上げた。

「まだ終わじゃないぞ。俺を君の中で受け止めてくれ」

くるぶしにちゅつと口づけられて、足先がぴくりと跳ねる。切っ先を蜜口にあてがわれたかと

思った途端、硬く張った先端が押し込まれ、極太のものがずぶずぶと身体を割って入ってきた。
「ひああっ！」

指とは段違いの圧迫感に襲われる。長大な肉塊に埋め尽くされていく感覚に身体が慄き、無意識に開いた脚が強張った。

しかし、中を広げるように小刻みに腰を揺らされると、張りだした亀頭の先端で敏感な蜜褌をぐりぐりと擦り上げられ、ふたたび気持ち良さが膨れ上がってくる。

「ひあっ……今、だめえ……く、るし……」

いまだ絶頂の余韻から抜けだせていない葵には、強すぎる刺激だった。とんとんと軽く腰を突き立てられるだけで、媚肉が物欲しげにうねり、男根をきゅうきゅうと締めつける。

「……っ、く……締めつけすぎ、だ」

湊斗が動きを止めて、呻くような声を漏らす。

彼は手を伸ばし乳房を鷺掴みにすると、上下左右に押し回し、指の腹で掠めるように乳首に触れる。そしてゆっくりと腰を動かし始めた。

「ん、はあ……っ、あ」

ぴりぴりと小さな刺激が胸から伝わり、強張った下肢から力が抜けていくと、頭上にいる湊斗がほっと息を吐いた。

「情けない男にさせないでくれよ」

湊斗は汗ばんだ髪をかき上げ、軽く頭を振って言う。

葵は薄く目を開けて、その様子をぼんやりと見つめた。
(かっこいい……)

気持ち良さげに目を細めた色気たっぷりの顔。いつの間にワイシャツのボタンを外したのか、シャツの隙間から覗く逞しい胸元。そのすべてに目を奪われる。

今さらだが、自分が湊斗に抱かれていることが非現実的に思えてきた。

「どうした？ 痛むか？」

湊斗が身体を倒すと、また違った角度で中を穿たれて、葵の口から甘ったるい吐息が漏れる。

「は……っ、ちが……副社長……かっこいいなって」

自分でもどうしてそんなことを口に出したのかわからなかった。本心であることはたしかだが、この場の空気に吞まれたのかもしれない。

「ふ……っ、そうか」

葵の言葉が心底意外だったのだろう。湊斗は驚いた様子で目を瞬かせたあと、嬉しそうに笑った。その顔が子どもっぽくて、また意外な彼の一面を知る。

「好きな女性にかっこいいと思われているのは嬉しいが……副社長じゃなくて、名前で呼んでくれたらもつと嬉しい。葵も、名前を呼べと言っただろう？」

湊斗はゆっくりと腰を揺らして浅瀬を擦り上げながら、艶めかしい微笑みを浮かべた。愛液がかき混ぜられ、腰の動きに合わせてふちゅふちゅと耳を塞ぎたいほどの淫音が立つ。

「な、まえ？」

「そう……俺の名前、言えるか？」

「あつ、み、など、さん？」

葵が名前を呼ぶと、正解だとはかりに抽送のスピードが速まる。

徐々に腰の動きも大きくなっていき、指では届かない深いところを張りだした亀頭の先端で擦り上げられた。

「はあつ、あつ、ああつ」

得も言われぬ快感が迫り、葵は白い首を仰け反らせて喘ぎ続ける。

「湊斗さん……っ、湊斗さつ……音、やつ」

「音？ ああ、これか？」

湊斗は楽しげに口の端を上げながら、とんとんと浅瀬を突くように腰を揺らした。切っ先が蜜洞に埋まるたびに、ぐちゅつと空気が抜けたような音が立つ。

「それ……やあ、音、立てない、で……っ」

「葵が気持ち良くなってくれている証拠だろう？」

湊斗はそう言いながら、至極楽しげに腰を突き立てた。ぐちゅんつとひととき大きく音が立ち、結合部から溢れた愛液が臀部に流れ落ちる。

「んっ、わざと、してる、で……っ」

睨むようにして彼を仰ぐと、胸の中心でつんと勃つ乳首を指の腹で転がされた。

「仕方ないだろう。恥じらう葵が可愛くてたまらないんだ。会社では見られない君が、俺にそんな

顔を見せてくれると思うと……な。ほら、もつと乱れて、気持ち良くなつて」

湊斗は恍惚とした目で葵を見据えると、勢いよく腰を突き上げた。

「ひああつ」

突然の強烈な刺激に背中が波打ち、悲鳴のような甲高い声が漏れた。

ぐりぐりと激しく蜜嚢を擦り上げられ、長大な陰茎を奥へ奥へと押し込まれる。激しい律動を繰り返されて、羞恥心を感じる余裕が失せていく。

「ほら、さつきよりぐちゃぐちゃになつてきた」

湊斗は興奮しきった声を漏らし、腰を突き立てながら葵の乳房をぐいぐいと押し回す。

これ以上ないほど奥深くを穿たれ、互いの恥毛が擦られる刺激さえも快感となる。

「あつ、あああああつ」

苦しいほどの愉悦に押し流され、葵は縫るように湊斗の腕を掴んだ。感じやすいところをくまなく擦り上げられて、あまりの気持ち良さに目眩がしてくる。

「湊斗さつ……あつ、ん、それ……気持ちいい」

「たまらないな……っ、君が、こんなに可愛い女性だとは思わなかった」

湊斗の荒い息遣いと、淫らな言葉にますます身体が昂り、下腹部がきゅうつと張り詰める。彼の口から発せられる甘い言葉の数々に、わずかに残った理性が奪われた。

「可愛いって、もつと……言つて、ほし……っ」

湊斗の背中に腕を回し縫りつきながら言うと、身体の中で脈打つ怒張が大きく膨れ上がった。